

ひきこもる若者当事者が求める オルタナティブな自立観

—「包摂から参加へ」を視点として—

和田 真依

近年、若者の「自立」が困難となる状況があるなかで、若者たちに「自立」をすることを求める動きがある。しかし、この「自立」は、中西新太郎(2009)が述べている「力強い自立」に依拠するものであり、競争主義的な価値観をもつ「自立」観であり、支配的な「自立」観ではないだろうか。この支配的な「自立」観の背景にあるのは、2005年に内閣府が出した「若者の人間力を高めるための国民宣言」があると考えられる。この国民宣言には、就労を通じた「自立」を求める動きがみられる。また、その前後にある「若者の自立・挑戦プラン」や「地域若者サポートステーション」の設置や実践でも就労を通じた自立が重視されている。しかし、若者の就労の「自立」は、簡単なことではないことが2000年以降のフリーターやニートの就労支援実践から見受けられる。なかでも、ひきこもる若者にとって、就労を通じた「自立」が困難なことは、内閣府の2016年の調査や2019年の調査、KHJ全国ひきこもり家族会連合会の調査から見受けられる。

このような状況から、支配的な自立観に対峙する自立観、つまりドミナントな「自立」観に対するオルタナティブな自立観を追及していく必要があるのではないだろうかと考えた。

本論文では、ひきこもる若者当事者に焦点をあて、ひきこもる若者当事者が求める自立観とはいかなるものであるのかを検討する。また、なぜ「自立」が困難になってきているのか、その社会的な背景は、いかなるものであるのかを検討する。

本論では、まず第1章で、日本における支配的な「自立」観がどのようなものであるのかを明らかにした。その際、1970年代、1980年代、1990年代、2000年代、そして今日展開されている若者の自立支援に分け、各年代で、どのような支配的な「自立」観が存在していたのかを整理し、また、その「自立」観によって、子どもや若者たちがどのように「自立」を阻害してきたのかを検討を行った。

第2章では、今日の支配的な「自立観」と対峙する自立観を追求することが可能となる実践についての検討を行った。その際、諸外国、なかでも隣国である韓国の代案学校「青少年職業体験センター(HAJA センター)」で展開されている実践哲学から、どのような実践が展開されているのかを学び、その実践が、今日の支配的な「自立」観をもつ社会から排除された若者たちに、どのようにしてオルタナティブな自立観を追求していくことを可能としているのか、また、その実践から彼らは、どのようなオルタナティブな自立観を獲得しているのかを検討した。

第3章では、ひきこもる若者当事者10名を対象としたインタビュー調査から聴取したデータを基に分析方法 M-GTA を用いて分析を行った結果を述べている。ここで明らかになったのは、ひきこもる若者当事者の自立を阻害してきた支配的な「自立」観がいかなるものであったのか、また、ひきこもる若者当事者が求める自立観とはどのようなものであるのかである。

第4章では結論として、第2章や第3章でみてきた、今日の支配的な「自立」観をもつ社会から排除されている状況にある、韓国の青少年や日本のひきこもる若者当事者が求める自立観、つまり、支配的な「自立」観と対峙するオルタナティブな自立観の創造や追求をしていくために、今後、日本ではどのような運動・実践・政策が求められるのかを検討した。その際、韓国の代案学校「青少年職業体験センター(HAJA センター)」の運動・実践、制度、政策から学び、そこから見えてきた今、日本に足りていない運動・実践、制度・政策について指摘、検討を行った。